

原 著

## 幼児音楽教育をハイブリットな教育として捉えて —ハイブリットな幼児音楽教育の基本になり得る理論を求めて—

平 松 昌 子

### The Hybrid Elements in Early Childhood Education — In Search of a Theoretical Framework of Hybrid Music Instruction —

Shoko HIRAMATSU

#### I. ハイブリットな教育とは

大人を対象にした教育は、一定の情報形態に限って学習を進めていくことを目的としている。そこには「専攻」といわれる枠があり、その専攻の中の情報を効率よく学習者に伝達していくことは、大人に向けた教育の重要な課題になっている。このような「専攻」の中の情報伝達は、数々の現象の中で大人へ向けた教育の主要な部分である。この視点から大人対象の教育を「情報伝達型の教育」として取り扱っていきたい。

大人に向けた教育と比べて幼児相手の教育には「専攻」と言われる枠がなく、さまざまな領域が関係し合っている。しかも、複数の領域に跨がる幼児教育の提供者は大抵、同じ人物である。数々の領域の中には、教育的特徴の強いものとそうでないものがあり、生活側の要素と教

育的要素が混在している。例えば、体を動かすことは「表現」や「健康」と関係しており、そこに音楽やリズムがあれば、歌いながら身体表現をすることが多く、その歌の歌詞を通じて言語を獲得する可能性も現われてくる。さらに歌詞に使われている「言葉」は、行動と並び道徳的な部分を含んでおり、「人間関係」においての重要な要素となっている。ある領域とある領域の組み合わせが変化し得る事もまた、幼児教育の一つの特徴なのである。つまり、分野Aの学習を放っておき、分野BやCの学習を進めることは状況によって適切であろう。幼児教育の担当者はこれらの構造を動かしながら教育を実行していく。幼児教育には多くの側面があり、これらの複合的な性質が幼児教育の重要な特徴となっている。本稿ではこの複合的な性質に焦点をあてながら、幼児教育を「ハイブリットな教育」として論じ、そのための理論的根拠を明

らかにしていきたい。

## Ⅱ. 音楽と図画工作の統合はハイブリットな教育を意識した姿勢を具現している

幼児教育と音楽の観点から見て第2次世界大戦後の日本では、音楽と図画工作が長年に亘り、幼児教育内の2つの独立した分野として取り扱われてきた。ところが、平成2年の幼稚園教育要領(注1)では当時の文部省はこれら二分野を統合させ、「表現」という新しい領域を設けたのである。後の文部省や文部科学省の幼稚園教育要領でも平成2年の方向付けは維持され、今日に至るまで継続されている。平成2年の段階で音楽と図画工作が「表現」の領域に統合された事は、日本の幼児教育において重要な意味をもっている。つまり、この範囲内の幼児教育に対してより複合的なイメージがそこに出現し定着してきたと言える。本稿の概念を使えば、これは、幼児教育のハイブリットな性質をより重視した姿勢である。教育と教育制度の歴史的経過の中で、幼児教育の発展がこの平成2年の方向付けによって新しい段階に差し掛ってきたと思わざるを得ない。

## Ⅲ. 教育の大部分は、今まで複合的なものとして捉えられなかった

幼児教育現場の常識では、幼児の育成と教育が以前から当然のこのように複合的なものとして取り扱われてきた。他方では、教育と教育機関の働きは数百年に亘り、おもに「専攻」と「情報伝達」のイメージで見られてきた。

近代と現代の教育史では、大学が最初にその姿を現わし、長い間「専攻別」の「情報伝達型の教育」を提供してきたのである。

19世紀を通じて義務教育の萌芽が見られた段階において、国民への教育が十分に無かったこ

とも関係し、大人まで学校へ通うこともあり、この「情報伝達型」のイメージが義務教育制度のある社会においても相変わらず主体となっていた。つまり教育を思い描くとき、普通、幼児教育以外の教育が想像されてきた。結局のところ、大人に向けられた教育が尺度となりがちで、幼児教育やそのハイブリットな性質が目目を浴びなかった。

一方、幼稚園の現場では幼児教育が以前から当然の事のように複合的な教育として取り扱われてきた。他方では教育全体の中で、幼児教育が相変わらずマイナーな部分である事も関係し、そのハイブリットな側面に焦点を絞った論議が十分に展開されていなかったと言える。この視点から見て、平成2年の幼稚園教育要領が幼児教育の中で、初めて複合的なイメージを優先させた事実は重要な意味をもっている。

## Ⅳ. 幼児教育関連の研究では、幼児教育の複合的な性質が論じられていない

しかしながら、この平成2年以降のイメージは幼児教育についての理論や研究等において、必ずしも反映されていない。「表現」で捉える領域内の理論の場合であっても、そのハイブリットな現象を重視する傾向は強くない。また幼児教育関連の教育論の上で、幼児教育の複合的な性質をテーマにした論議も見当たらない。

## Ⅴ. 具体的研究の数々は複合的な現象にふれているが、それについての理論を重視していない

確かに膨大な数の細かい研究や具体案が、幼児教育上の何らかの複合的な現象を取り扱っている。つまり、この大量の研究が最も実際のレベルにおいて事実上、幼児教育内のある複合的な現象に触れている。例えば、そこには幼児

教育の幾つかのファクターがそれぞれの領域を越えて関わり合っていることが観察されている。また、そこには幼児教育のある目的のための具体策や具体的なレシピが提供されている。そしてこのレシピを活かすためには事実上、一定の複合的な把握が必要となってくる。こう言った研究、具体案やレシピの数々が幼児教育に対してある程度の役割を果たし、その分野において幼児教育の発展に貢献しているはずである。またその中には複合的な現象が描写されているのも事実である。しかしながら、幼児教育のハイブリットな特徴についての理論的な意識が、そこには殆んど表現されていない。つまり、具体的なレベルのこれらの研究は、実際ハイブリットな現象に触れていたとしても、幼児教育のハイブリットな特徴そのものがテーマにないわけで、理論の対象にもならない。

## Ⅵ. 幼児教育の複合的な要素の重要性が増している

ところが、幼児を対象にした今日の教育において、その中の複合的な要素を重視する必要性が年々増してきている。

1. 幼児の背後にある家庭教育が希薄化し、幼稚園でそれに応じた取り組みが必要になる。
2. 子どもの善悪判断の育成までが幼稚園における課題となる。
3. 健常児以外の子どもとの共生を図るため、幼稚園教諭が専門外の知識を必要とする。
4. 子どもの社会化が以前より複雑な問題を提供し、適切な解決策が求められる。
5. 少子化に伴い、親の関心度や要求が高くなってきている。
6. 「自然保護」、「インターネット」、「国際化」、「アンチ・バイヤス」のような全社会的テーマがあり、幼児教育上の対応が求められる。

7. 幼児をあずける施設の多様化により、種々の条件下での複合的、独創的な対応と判断が幼稚園教諭に要求される。

これらの現象をみれば、幼児教育を取り巻く状況が煩雑化し、その中のハイブリットな性質について重視する必要性が日増しに高まってきている。従って、幼児教育のハイブリットな現象を捉えるための理論までが必要になってくる。

幼児教育関連の従来の研究においては、これに相応しい理論が見受けられない。その反面、教育制度や教育一般を対象とした以前の教育論では幾つかの場合、その教育の複合的な現象を捉えた理論があり、私たちに種々のヒントを与えてくれている。つまり、幼児教育の中のハイブリットな要素を捉えるためには、他の教育論のハイブリットな現象についての理論が参考となり、その方向へ向けてこの研究を深めることができる。

## Ⅶ. フレーベルの原点にかえて

1840年にドイツのブランケンブルグにおいてフレーベル（1782～1852）（注2）が設立した幼稚園は、現代の幼児教育の幕開けを意味しており、幼児教育とその制度化がその地点から世界に広まった。義務教育の登竜の段階において、ペスタロッチ（1746～1827）（注3）の教育論がフレーベルに影響を与えていた事は事実である。さらに私たちは、フレーベルの著書（注4）により哲学者フィヒテ（1762～1814）（注5）からフレーベルへ伝わった影響を感じ取することもできる。フィヒテが人を中心にした統一的な世界観を提供しようとし、その際に人の発展を重視していたことは有名である。同様にフレーベルが幼児の発達、育成、その精神的、文化的進展に視点をおき、その場合の人の形成に焦点をあてていた。いろいろな概念が今日、子ども

の発展と発達を表現しているわけだが、このための道筋をフレーベルがつくった事は彼のひとつの実績でもある。「キンデルガルテン」という概念もまた、この考え方を表現している。「幼児のため」の「園」の中で子どもが成長し、育成されることはキンデルガルテンの語彙のメッセージである。フィヒテの哲学が統一的な世界観を形成しようとしたのに対し、フレーベルは幼児の育成についての統一的なイメージを提供しようとしていたとも言える。これらの事を見れば、フレーベルは幼児育成の複合的な特質に大変大きなウエイトをおいていた事が明らかである。

つまり、幼稚園、幼児教育論等が誕生したその初期の段階において、幼児教育のハイブリットな性質を強く強調する姿勢が見られていた。幼児教育のハイブリットな性質が強く意識されていたこの時代に幼児教育が世界に広まり、市民権を獲得してしまう。残念ながらフレーベルの幼児育成論は、今日の幼児教育論から随分と懸け離れ過ぎている。その頃の概念の殆どは、今日の幼児教育論と教育学に繋がらない。すなわち、フレーベルの理論に立脚した今日の幼児教育のハイブリットな性質についての理論を構築させることは、もはや困難になってきているのである。

しかし、幼児教育の中のハイブリットな現象についての理論的把握が重要である事が、この原点に舞い戻ったとき一層強く意識されるだろう。

#### Ⅷ. 複合的な現象を重視した他の教育論： 城戸幡太郎

フレーベル以後の段階において幼児教育が定着し始めるが、時代の変遷の新しい条件下では、幼児教育についての取り組みは多様化し、そのハイブリットな特徴についての関心が稀薄化さ

れてきたと言える。寧ろ長年に亘り、主流に属さない教育論者だけが各々の状況において、幼児教育や他の教育のハイブリットな特徴について関心を示してきた。

例えば、日本の教育論者の僅かが、教育一般の中のある現象を重視し、そのハイブリットな性質を強調してきた。なかでも城戸幡太郎(1893～1985)は「文化と個性と教育」(注6)において、教育文化と個性化の関連性を捉えている。また彼は民生教育を非教育者側に合わせた教育としている。言い換えれば、彼は非教育者を社会と文化の中の個人として捉えると同時に、非教育者中心に教育を論じている。社会と教育を結びつけた多くの論者の場合、一定型の社会論が教育論の土台を提供している。しかし城戸幡太郎の理論的見地はこれとは異なっているし、単なる個人重視型の教育論とも異なっている。

今日においての複合的な幼児教育を考える際、幼児のニーズから把握する必要があるわけだが、幼児を取り巻く制度と他のファクターからもハイブリットな現象を捉える必要がある。さらに言えば、この両者に及ぶ把握でなければ、幼児教育のハイブリットな部分までを理解する事ができない。

#### Ⅸ. 倉橋惣三

倉橋惣三(1882～1955)は大抵、子どもを中心にした教育論者として位置付けられてきている(注7)。しかし家庭内の教育をも重視した彼は、けして子どもの教育を狭過ぎる視野で捉えようとはしなかった。彼は教育や幼児教育の生活への役目を強調し、「付属幼稚園」と呼ばれるものの普及にも努めていた。尚、彼は幼児が発達し自己を実現できるためには、それなりの自由と物が必要であることを意識していた。今日の「表現」の視点から見て、彼は幼児の自己表現を重視し、そこに関わる複数のファ

クターまで彼が視野に入れていたと言える。幼児中心主義的な幾つかの理論の場合より、彼が幼児教育のハイブリットな性質を重視し、応用的な幼児教育論を提供してくれていたと言える。

子ども周辺の環境が教育目的に内在しているという考え方は、倉橋惣三のハイブリットな教育論の中で表現されている。今後の幼児教育を考えたときにもこのアプローチが有効であり続ける。

## X. 山下俊郎

その一方では、山下俊郎(1903~1982)(注8)が教育を取り巻く環境を対象にし、別のハイブリットな教育論を提供していた。子どもの背後には家庭環境や数々の社会的、文化的背景があり、これらのファクターについての把握が教育の成果との関わりをもっている。また、このハイブリットな現象についての把握が不充分である場合には、教育そのものまでも被害が及んでくる事がある。山下俊郎が推奨したハイブリットな教育論の延長線上には「問題児教育」の幾つかのモデルが後に表出してくる。幼児教育の課題が複雑化している現代では、教育論のこの複合的な流れは重要であり続ける。さらにいえば、そこには教育の中の複合的な現象を捉えた教育論があり、細々と今日の教育まで引き継がれている。

## XI. プラグマティズムの基本姿勢を参考にして

教育に関わりをもつ研究をみれば、アメリカ合衆国において2つの大きな流れを区別することができる。そのうちのひとつは理科系と同様な方法を用いて人間と動物の反応等を観察し、実験と証明を重視する伝統である。

もうひとつはプラグマティズムの流れである。プラグマティズムはパース(1838~1914)(注9)とジェームス(1842~1910)(注10)の時代にハーバード大学から発生し、デューイ(1859~1952)(注11)を超えて現在のネオ・プラグマティズムまでの継続した伝統をもち、長年に亘り、米国の学問において中心的な役割を果たしてきたと言える。百年程の経過の中でプラグマティズムの方法論はしばしば教育と教育学に影響を及ぼし、他の多くの学問にも浸透し、世界中、無数の研究を方向付けし続けてきた。その殆どの場合、プラグマティズムの方法論の基本姿勢は、もはや水と空気のようなものになってきている。つまりプラグマティズムを知らない研究者が事実上、プラグマティズムの方法論に基づいて研究を進めている事がごく普通の状態になってきている。

プラグマティズムの理論的見地について略言することは困難である。極端な省略で表現すれば、プラグマティズムは一直線上に実践と理論を置いていると言え、これがプラグマティズムの重要な特徴である。例えば、現在、ハーバード・ビジネススクールでは、実際の企業の経営やそのシミュレーションが課題になっている。そこでは、それに必要な理論が導入され、引き続き必要に応じてデータ、実践や実験も導入されてくるようになってきている。これらの場合、経営学以外の学問の理論や知識が必要になる事が少なくない。つまり従来それぞれの学問の壁を乗り越える姿勢がそこに見られるのである。専門領域外の手段が必要となときに、これを用いることはプラグマティズムの重要な特徴である。プラグマティズムのこの姿勢を見れば、プラグマティズムの方法は教育内外に存在する数々の分野のハイブリットな現象を捉えるために適応していると考えられる。言い換えれば、プラグマティズムの理論的見地は教育と教育関連の分野における複合的なアプローチを進め

るために適切な根拠となり得る。

ところで以前に、教育学や教育論がプラグマティズムに影響されたとき、プラグマティズムのハイブリットな現象に対する対応は、残念ながらそれほど強調されてはいなかった。つまり、プラグマティズムに基づく従来の教育論の大部分は、現在の幼児教育上のハイブリットな現象を把握するために十分な根拠を提供してきていない。従って、教育や幼児教育の中のハイブリットな部分を捉えるにあたり、プラグマティズムのこの従来の教育論の細部を避け、かえってプラグマティズム自体の方法論に遡るのが相応しい。

プラグマティズムそのものは教育論ではない。しかしそこにはさまざまな領域内のハイブリットな現象を捉えるための適切な理論的な仕組みが提供されている。さらに言えば、プラグマティズムが、実践と理論を関係づけるからこそプラグマティズムは現代の幼児教育を考えた場合の重要な役割を果たし得る。例えばプラグマティズムのこの原点からみて、「表現」と言う幼児教育の領域において、理論上と実践による取り組みが重要になってくる。

プラグマティズムの原型に近い方法論が、今日の幼児教育のハイブリットな現象を把握するために相応しいアプローチを提供してくれている。勿論、このアプローチを通じて、必要な方法論の枠組みだけが与えられているのである。

尚、これまでプラグマティズム以外のところでは幾つかのハイブリットな一般教育論が発生してきた。プラグマティズムの方法論とこれらものを組合せたとき、より安定した理論的把握が可能になってくる。

つまり、今日の幼児教育の「表現」という領域内のハイブリットな現象と課題に対する理論が求められる際に、プラグマティズムの広い枠組みは相変わらず適切である。それに加えてプラグマティズム以外の教育論の幾つかは、幼

児教育の中のハイブリットな現象を捉えるために重要になり得る。総括して言えば、プラグマティズムの基本的な方法論と並び、幾つかのハイブリットな一般教育論が、幼児教育のハイブリットな性質を捉えるための理論的根拠となり得る。

## XII. 終わりにかえて

幼児教育は以前からさまざまな具体的なレベルにおいて、ハイブリットな側面を示してきた。幼児教育以外の教育と比較してみても、このハイブリットな性質は元来、幼児教育の重要な特徴となっている。にもかかわらず、幼児教育のごく当然なこの特徴は、これまで殆ど理論の対象にならなかった。ところが、平成2年の幼稚園教育要領で音楽と図画工作が統合された事により幼児教育のハイブリットな性質はこの範囲において、一層ストレートに認められるようになった。従って私たちに、幼児教育の中のハイブリットな部分についての理論を深めていく機会がここに与えられたのである。

「表現」の領域内の幼児音楽教育では、従来の教授法を参考にしながら音楽を教え続ける事が一部においては、いまだ適切であろう。

一方、「表現」という枠の設定はそれ以上の取り組みを求めている。つまり「表現」の概念の中に、幼児教育のハイブリットな方向付けが含まれている限りにおいて、それに相応しいハイブリットな教授法までが必要になってくると言える。

この視点から見て、例えばハイブリットな要素を含んだ音楽への指導法はひとつの目標にならなければならない。事実上、従来の音楽教授法の内には、ハイブリットな要素を所々に含んだものがある。また、第2次世界大戦後の段階において、カール・オルフが子どもを対象としたハイブリットな音楽教授法を紹介し、実践し

ていたことが広く知られている。以前のこのような例を通じて、ハイブリットな幼児音楽教育の教授法のために幾つかのヒントが私たちに与えられている。にもかかわらず、それぞれの詳細の部分に関して、従来のこのようなハイブリットな教授法は「表現」という目標設定にまだ十分に適応していない。今後、「表現」という領域の視点からみて、これらのモデルを整理することが必要であろう。同時に、「表現」という条件に適応したハイブリットな教授法を新しく創り上げるための基本的な方法論が求められてくる。

幼稚園現場においての課題は幼稚園教諭の養成の過程と関係しているわけだが、本稿の概念で言えば、幼稚園教諭養成課程において「専攻」と「情報伝達」の考え方がこれまで主なウエイトを占めていた。就職した後に、幼稚園教諭になった者は、自らハイブリットな音楽指導ヘシフトできることがこれまでの方針の前提となっていた。就職後、個々の幼稚園教諭が自ら複合的な幼児音楽の指導へと転換できるのが理想ではあるが、今後の幼稚園教諭養成においてはこれまで以上の事が求められるに違いない。ということは、幼稚園教諭養成課程で予め、ハイブリットな音楽指導を実践するための基礎固めが必要になってくる。つまり幼稚園教諭養成の過程にハイブリットなタイプの学習を一定程度導入すると、就職後のハイブリットな学習指導への転換が容易になるということである。また、「表現」の領域内のハイブリットな教育モデルを確立させるために、それに相応しい理論的な枠組みが必要になってくる。幼児教育内のハイブリットな現象についての把握がそのための土台にならなければならない。

幼児周辺の最近の動向を見た場合にも、このような方法論の必要性が感じられる。例えば今日の幼児は毎日のように音楽、音声と映像の複合的な環境に出会っており、幼稚園教諭がこの

ことを無視できない。つまりこれらの現象に適応した対応が幼稚園教諭に求められてくるということになる。その際、幼稚園教諭が充分に対応できるのであろうか。この前提となるものの一つは、幼児教育上のハイブリットな要素に対して、幼稚園教諭が示す意識である。つまり、幼児周辺にある複合的なファクターが増えるにつれて、幼児教育内のハイブリットな部分を客観的に捉える意識が、幼児教育者に要求されてくる。

フレーベルのとき以来、一般教育の中のハイブリットな現象を意識した教育論があり、その内の僅かは幼児教育上の現象を捉えるためのモデルになり得る。これと並びプラグマティズムの伝統は、ハイブリットな幼児教育論を進めるために大きな枠組みを提供し続けている。プラグマティズム自体に潜んでいるハイブリットな方向性があるからこそ、プラグマティズムはこの場合の方法論の根拠になり得る。

幼児の発達や育成を幼児の社会化として、また文明の参加への歩みとして解釈する考え方があり、これはプラグマティズムの創始者であるパースの思考の中にも強く表れている。(注12) パースの時代においては、幼児の発達や育成についてのこのイメージが彼の哲学の中で登場しているが、一世紀余りを経た今日でも、この考え方は有効であり続けている。今日の世界において幼児教育のハイブリットな要素についての意識を深める必要がある場合にはパースの考え方が教育論の上でも重要な役割りを果たし得る。尚、幼児教育のハイブリットな部分について把握する際にも実践と理論の両方面からの取り組みが必要になる。

とりわけ幼児教育の中の音楽と図画工作の2分野が統合されて「表現」という領域が誕生して以来、その領域内のハイブリットな要素についての把握が必要となり、このための理論、教授法や音楽教授法を含む対応までが求められる

のである。

#### 〈引用・参考文献等〉

- 注1 文部省「幼稚園教育要領」大蔵省印刷局、(1988)
- 注2 フレーベル (Fröbel, Friedrich Wilhelm August) (1782~1852)
- 注3 ペスタロッチ (Pestalozzi, J. Heinrich) (1746~1827)
- 注4 フレーベル著 荒井武訳「人間の教育」、岩波書店 1992
- 注5 フィヒテ (Fichte, Johann Gottlieb Fichte) (1762~1814)
- 注6 城戸幡太郎 (1893~1985) 城戸幡太郎著「文化と個性と教育」、伊藤書店 1925
- 注7 倉橋惣三 (1882~1955) 岡田正章他「世界の幼児教育」、日本らいぶらり 1983
- 注8 山下俊郎 (1903~1982) 日本保育学会会長をも務めていた彼は、教育を取り巻く社会環境を重視していた。彼の「教育的環境学」、(岩波書店 1952) は特徴的である
- 注9 パース Peirce, C. S. (1838~1914)
- 注10 ジェームス James, W. (1842~1910)
- 注11 デューイ Dewey, John (1859~1952)
- 注12 笠松幸一氏他著の「プラグマティズムと記号学」は、プラグマティズム全体の流れを描写している。そのなかで笠松幸一氏が「～幼児は、はじめ自己意識をもっていないが、成長とともにその子どもは無知や誤謬を知るようになる。そこで、この無知や誤謬が生ずるところの自我を想定せざるを得なくなる。つまり、子どもは無知や誤謬の経験において自己の存在を推論するようになる。～」と述べながら、パースの考え方を描いている。(笠松幸一・江川 晃著「プラグマティズムと記号学」、勁草書房 2002 p.27)